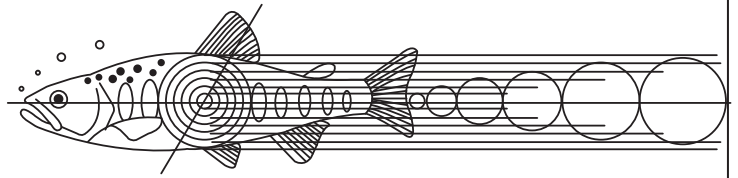


news

長良川市民学習会ニュース



いま、長良川が危ない！



No.21

2015年12月18日

いま、長良川が危ない！（内ヶ谷）・・・表紙
はじめに／情勢と活動報告・・・P 3
次世代につなぐトーク・・・P 6
球磨川・荒瀬ダムからの報告・・・P 9

霞ヶ浦からの報告・・・P12
参加者の声／今後の予定・・・P14
「導水路」事業の中止求めて・・・P15
校歌に歌われた長良川・・・P16

長良川を放射能で汚してはならない！私たちは、原発の再稼働に反対します。

いま、長良川が危ない！

表紙の写真は今年 11 月 12 日に内ヶ谷ダム工事現場を撮影したものです。

車両進入禁止地点から工事用道路を 2 km ほど歩き、谷に降りると表紙左下のように工事用の仮設栈橋道路が作られていました。かつては人を寄せ付けない深く美しい谷でヒルを恐れ、スリルを味わいながら、「長良川水系・水を守る会」の案内で沢下りしたところでした。風景を変えてしまった工事用道路を辿って進むと工事現場が現れてきました。ダム本体の工事に取り掛かるために、川をトンネルで一時的迂回させる転流工事中でした。右下が転流工の呑口です。

右上の山中の小さく見える看板。上は「ダムの天端」、その下は「SWL」サーチャージ水位（湛水面）の高さをしめすもの。ちなみにダムの高さは 81.7m。誰も必要としないダムのためにこの貴重な渓谷が沈められるのかと思うと人間の愚かさに怒りを覚えます。

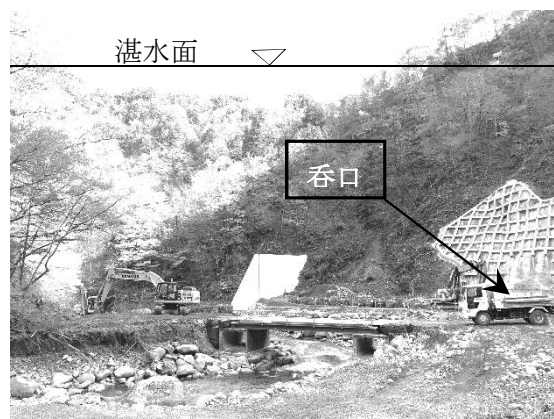
「コンクリートから人へ」のもと、それまで眠っていた内ヶ谷ダム建設事業は検証対象ダムとなりました。岐阜県で 4 回の「関係地方公共団体からなる検討の場」を経た後、国は 2012 年 6 月長崎県石木ダムなどととも「事業継続」を決定しました。検証とは名ばかりでダムありきの「かっこつけ」でしかありませんでした。石木ダム予定地では住民が機動隊の導入にも負けない体を張った約半世紀のたたかいを続けています。11 月 30 日、石木ダム事業認定取り消し訴訟提訴。法廷での闘いも始まりました。

国は 83 のダム事業を検証対象としましたが、現時点で 12 事業が残り、検証途中となっています。その内の一つが木曾川水系連絡導水路（徳山ダム導水路）事業です。

先月 11 日突然同事業の「検討の場」第 3 回幹事会が開催されました。第 1 回「検討の場」開催以来 4 年ぶりのものです。長い間マスコミで取り上げられることもなく、この事業が「取りやめになった」と思っている市民も多くいます。名古屋高等裁判所が 9 月に住民の訴えを棄却する不当判決を言い渡したばかりのことであり非常に危ない状況です。

ちょうど 8 年前「長良川に徳山ダムの水は要らない！」と声をあげた私たちですが、今まさにその原点に戻った取り組みが求められています。

(武藤仁)



(はじめに)

自然が残る長良川上流

長良川市民学習会代表 粕谷志郎

先月、郡上市の長良川上流の沢で懐かしい生き物を発見しました。肺吸虫の幼虫(メタセルカリア)です。郡上市で捕獲された鹿の血液から肺吸虫に対する抗体が検出されたとの報告を受けて、サワガニの調査を行ってきました。そのうちの一匹からメタセルカリアが見つかったのです。久しぶりに知己に会った思いです。肺吸虫がそこにいるということは、イタチ、キツネ、テンなどが生活しており、カワニナも健在で、サワガニも必須だということです。病原体ですので発見して喜んではいけないのですが、長良川の下流とは対照的で嬉しくなっていました。長良川の天然アユにはかつて三千匹を上回る宮田吸虫が鱗に寄生していましたが、河口堰が閉鎖して数年で減り始め 2008 年には百数十匹に減少しました。河口堰の閉鎖後、マシジミも激減しており、カワニナの生息環境が悪化したものと推測しています。寄生虫を撲滅する有効な手段が環境破壊であるという皮肉な現実を目の当たりにしていたから、肺吸虫の発見に喜びに似るものを感じてしまいました。しかし、ジビエ料理も盛んになってきましたが、鹿刺しは止めた方が良いでしょう。

生態系を混乱させる木曾川水系連絡導水路が解凍されそうな心配です。冷たく有機物の多いダムの水を鵜飼の行われる上流に流せば、沈み込み川底はぬるぬるのヘドロとなるでしょう。中流の自然まで破壊するわけにはいきません。

情勢と活動報告

長良川市民学習会事務局長 武藤 仁

前号(20号)発行の6月1日以降の長良川をめぐる情勢と長良川市民学習会の活動を報告します。

河口堰運用20年となる今年。開門調査実現をめざして流域の市民団体など21団体の参加で4月に結成した「よみがえれ長良川」実行委員会は、6月10日岐阜県に対し長良川をよみがえらせるために「河口堰の開門調査実現」「導水路事業の中止」「内ヶ谷ダム建設の中断」をめざす取り組みを求める要請を河川課に対して行いました。あわせて県政記者クラブにおいて河口堰が閉じられた7月6日に因んで私たちが計画する7月4～6日の行動を発表し市民にアピールしました。新聞各社は長良川河口堰を検証する特集を組み「開門調査」を問題提起しました。



6月10日 岐阜県河川課要請行動

7/4 長良川環境観察会

7月4日(土)は、午前には河口堰周辺の「環境観察会」と「よみがえれ長良川アピール行動」を行い、午後には木曾三川を比較する観察会、夕方、川原町散策と鵜飼観覧を行いました。

観察会は小雨となりましたが、60名が6艇の船に乗り込み河口堰周辺の環



境と川底を採泥器で調査しました。長良川ではヘドロ、揖斐川では砂が採取され環境の違いは明確でした。そのあと堰上流側で「よみがえれ長良川」「ゲートを上げよ！」などの横断幕を船上で一斉に掲げる行動をしました。テレビニュースでも報道され、アピールの効果がありませんでした。

午後は背割り堤から揖斐川と長良川のヨシハラに入り比較観察しました。同条件で行ったカニの捕獲調査では圧倒的な数の違いがあり生態系が破壊された長良川の実態がよくわかりました。水辺環境比較は木曽三川公園の木曽川と長良川の岸で行いました。潮の干満の影響から遮断された長良川の岸は植物もなく寂しい景観で、木曽川は植物、鳥・・・生き物が豊かでした。

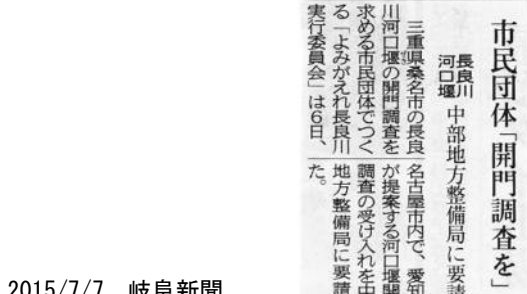
環境観察会で採取したヘドロ、砂、カニは翌日のシンポジウム会場に展示され、「河口堰が環境に与える影響」の理解を来場者に深めました。

7/5 トーク&シンポジウム

7月5日(日)は長良川国際会議場においてトーク&シンポジウムを開催しました。長良川で生きる大橋さんと平工さんの「世代をつなぐ」トーク、つるさん(熊本県球磨川)と浜田さん(茨城県霞ヶ浦)を招いてのシンポジウムは感動的で充実した内容でした。参加した300人の市民に「河口堰開門調査実現」の



2015/7/6 中日新聞



2015/7/7 岐阜新聞

期待と確信を与えました。開場には13メートルに及ぶ「長良川河口堰年表」とともに歴史的にも貴重な文献・資料が展示されました。参加者には長良川河口堰年表が配られました。

イベントの最後に参加者一同で開門調査実現を求める「よみがえれ長良川」集会宣言を採択しました。この宣言は、翌日の国交省要請行動で手渡されました。

7/6 国土交通省要請行動

実行委員会は、長良川の「命日」7月6日(月)に国交省中部地方整備局へ「河口堰開門調査実現」の要請行動を行うとともに、前日採択した「よみがえれ長良川」集会宣言を手渡しました。交渉の中で中部地整は、河口堰の検証をすすめる愛知県が提案する「合同会議」の提案について、「愛知県が論点をまとめてから対応したい」として、積極的な姿勢を見せませんでした。なお、同日あった定例記



中部地方整備局への要請書を手渡す「よみがえれ長良川実行委員会」の粕谷志郎共同代表(名古屋市内)

者会見で大村愛知県知事は「河口堰の検証は粘り強く進めていきたい」と表明しました。

マスコミは連日、河口堰問題を報道しました。その中で私たちの取り組みや開門調査に焦点を当てた報道も多く、世論を喚起しました。

一方で国・事業者は20周年にもかかわらず目立った記念式典やイベントを開催しませんでした。「ムダで環境破壊の河口堰」には触れたくないのが本音なのでしょう。河口堰を知らない世代が増える中、「知らせていく」ということがとても大事になりそうです。



河口堰検証特集を第1面で掲載した岐阜新聞

長良川のアユ - 準絶滅危惧種指定 - 世界農業遺産認定

12月15日国連食糧農業機関（FAO）が「清流長良川の鮎」を世界農業遺産に認定しました。多くの岐阜県民が望んでいたことであり喜ばしいことです。しかし、河口堰の影響を直接受けている下流域を申請から外したように「見られたくないものには蓋を被せる」動きが広がることを恐れます。

本年4月、岐阜市は人の手を借りなくては生存していけない状態にある長良川のアユを準絶滅危惧種としてレッドリストに登録しました。ところがこれに漁協が猛反発。岐阜市に対し「風評被害を受ける。レッドリストから外せ！」と迫りました。岐阜市はリストからはずことは拒否しましたが「アユ（天然）」の名称変更を検討することとしました。

長良川では、アユの生存の最も大きな障害が河口堰であるにもかかわらず、その問題には目を背け「日本一のアユ漁獲量」を目指してひたすら大量放流の拡大に力が注がれています。多くの魚類専門家がこの「長良川の異常」を心配しています。

いま、凍結している徳山ダム導水路建設事業に再開の兆しがあります。導水路の放水地点は長良川中流の岐阜市東部です。長良川のアユの産卵場の中心は岐阜市内です。40万都市でアユの産卵？驚く人も多いでしょう。上流（本流の）にダムが無い長良川だからです。

その岐阜市の東端（上流側）から徳山ダムの冷たい水（水温差が5℃を越えることもある）が放水されるのですから産卵場が重大な事態となることは目に見えています。岐阜市内に集中する伝統漁法「瀬張り網漁」も姿を消すことになりかねません。そうなれば世界遺認定から中流域も外されることになるでしょう。

世界遺産として次世代に長良川を残すためにも絶対導水路事業を許してはなりません。そして河口堰を開門し、内ヶ谷ダム建設をやめさせて上流から下流まで長良川を一貫して世界遺産として次世代に残しましょう。



2015/12/16 中日新聞

よみがえれ長良川～河口堰20年・開門調査実現を！

7月5日（日）、長良川国際会議場においてトーク&シンポを開催しました。300名の市民が参加。午前には長良川で生きる漁師と鵜舟の船頭さんのトークで「世代をつなぐ」テーマが生き参加者を感動させるものとなりました。午後のシンポジウムにはつるの祥子さん（球磨川・荒瀬ダム）と浜田篤信さん（那珂川・霞ヶ浦導水路）をお招きし「河口堰の開門調査実現を！」を考えました。

会場には長良川河口堰問題の年表や文献、資料を数多く展示し、参加者の注目を引きました。実行委員会はこれにあわせ「河口堰問題 年表と資料」を作成し配布しました。イベントの最後に参加者一同で開門調査実現を求める「よみがえれ長良川」集会宣言を採択しました。

本ニュースでは、大橋さんと平工さんのトーク及びシンポジウム前半のつるさんと浜田さんの報告を紹介します。紙幅の制限から事務局の責任でまとめさせていただきました。当日のようすは「よみがえれ長良川」のホームページ <http://nagaragawa.jimdo.com/> に動画や写真で報告してありますので、合わせてご覧ください。



次世代につなぐトーク「長良川に生きる」

平工顕太郎さん & 大橋亮一さん



聞き手 富樫幸一

富樫 まず自己紹介をお願いします。

平工



“結（ゆい）の舟”と名付けた漁舟を使って、若者や子供たちをはじめ多くの人たちに川漁師の目線から自然、歴史、文化の宝庫である素晴らしい長良川を体験してもらう舟旅を提供しています。この舟は3年程前、川原に打ち上げられていた使われなくなっていた古い漁舟です。およそ30年前に新造されたこの舟は、僕たちの知らない河口堰が運用される前の長良川を知っていて、時代の変遷を見続けてきました。この舟を修理して、この舟に案内役をしてもらって、長良川のことをもっと知ってもらいたいと思うようになりました。川に関わる人が少なくなると、何か問題が起きても解決できないと思うんです。川に関わっていないと思入れも生まれません。私一人は小さな者ですから何もできないので、多くの仲間ができればいいなと思っています。また5月から10月まで夜は鵜飼で山下鵜匠の補佐をする中乗り船頭をしています。そして一年を通してアユ漁をはじめとする川漁師をしています。漁協の一員として天然アユの種付け作業の手伝いもしています。金華山があって、お城があって、長良川があり、小さい舟が浮かんでいるこの風景が大好きで、これを継承していきたいと思っています。

富樫 大橋さんが今の平工さんの年齢の頃のことを話していただけませんか。

大橋

20代、30代の頃の長良川は本当に宝の川でした。川に行きや魚がおりました。本当に私らにとっては、大事な川でした。私の漁場は河口から36キロ地点ですが、春には兩岸を稚魚たちが「よう上ってくるなあ」というくらい群れになって上ってきました。河口堰がなかったころはアユがこの辺りで産卵しました。今は、産卵場が10キロ位上流に上ったと思います。アユは、少しでも下流で生まれた方が海に近くて生存率が高いと言われませんか？今では人口孵化したものを車で河口まで運んどります。人間が手をかけて車で三重県まで運んでやるということは、私はいいいことだとは思いません。漁師としては自然の川で海へ送ってやりたいなあと思ったりします。



富樫 河口堰ができてからはどうでしたか？

大橋 人工横断構造物ができてから2年間は「あんまり変わらんあ」と言っておりました。なにが、3年目からひどいことになりました。一番減ったのはウナギとウグイ。ウグイも絶滅にちかいです。シラスウナギはゼロ。スズキやボラ、ドンコもいろいろなもんが駄目になりました。生まれた川に必ず戻って来てくれるサツキマスは千匹以上捕っ取りましたが、今年は70匹です。流速がなくなって漁にならんです。アユはねえ、昔は伊勢湾の川のどこからでも来てくれたもんです。アユは10年目くらいにゼロになりました。川底が砂ばっかになったからです。アユは石についた藻を食べるんですが、食べ物の無い所にはおらんわねえ。10年くらい鮎漁には行っ取りません。前は1トン半から2トンくらい捕っ取りました。それが、今はゼロになりました。県からも、もうお前んところは放流せんでもええぞよと言われとります。アユの棲まん川に誰がしたんや。アユがしたんか、人間がしたんやないか。長良川で増えたのは水位だけです。65年長良川とおつきあいしとります。わたしら終戦後の食糧難の時でも、お百姓と物物交換でご飯の心配はありませんでした。私と弟は漁師3代目ですがわたしらで終わりです。今は終末高齢者です。わたしらが生きてるうちにみなさんのお力で、ぜひ昔の長良川にさせていただきたい。それだけが願いです。川を眺めて毎日言っ取ります。

平工 10年前私が大学の水産学部を出て、内水面漁業で仕事がしたいと大橋さんのご自宅を訪ねました。ちょうどアユ漁を止められた時ですね。「自分の子供にも勧められないことを勧められない」と言われました。大橋さん憶えてみえますか？弟さんに怒られました。

大橋 大学卒業してねえ、バイクで来て弟に叱られとったなあ。「まだフウテンでおるんか。大学までやってもらって。早く就職しよ。漁師になるなら大学はいらん、中学出てこいって」と言ったんだ。この男（平工）は堅い奴で、就職しましたと報告に来たんやったね。

平工 その時、弟の修さんが蟹かごをくださったんです。いつか漁協の組合員になった時に使えよって。その蟹かごは私の宝物です。その時は修さんに言われたとおりにサラリーマンになりました。でも修さんが握手をしてくださったんです。ごつごつした手を感じた時、絶対に川で生きたいな、と思いました。今は妻と一才の息子がいます。大橋さんはアユ漁がだめならウナギ、蟹、手長エビ、サツキマスなど色々やってこられました。私も川漁だけでだめなら、舟旅とか鵜飼とか色々組み合わせ、覚悟を決めて、川でなんとか生計をたてたいと思っています。

大橋 みなさんに、今日来てくださった方々をお願いします。ぜひ河口堰を開けてやってください。そうすると、この坊も生活できるんです。お願いします。

富樫 今若手の漁師がいなくて高齢化がすすんでいます。若い人にどうつないでいけばいいか大変な問題です。平工さんはどう思っていますか。

平工 岐阜は清流の国と言っています。全国には清流はたくさんありますが、岐阜の魅力はなにかというと、166kmの流域全体にびっしりと人の生活が張り付き、40万人都市の県庁所在地の町の中にあつてなお水は清らかで、その恵を享受して物をつくったり商売したりして、川が人の生活と密に繋がっているところだと思うんです。「清流の国」ならば、その川で魚を獲って生活する者、つまり肝心な川漁師がいけないといけないのではないかと。長良川は若者一人くらい養えるポテンシャルがあると思うんです。どこまで続けられるか。ある意味挑戦です。自分が川で生活できることを証明しないと次の世代に繋がらないと覚悟しています。

富樫 平工さんはいろんな仕事を組み合わせられています。もう少し説明してもらえますか。

平工 鵜飼のシーズン中はいいですが、あとの7ヶ月はどうするか。妻と子供がいます。蓄えを崩しての生活もこれ以上は続きません。私の漁場は河口から55キロで、石がありアユがいます。色々な伝統漁法の数々を、64歳の漁師さんから1から学んでいるところです。あと10年しか一緒に漁をして教えてもらえない。私はまだ3年目です。だったらとことん吸収しなきゃならない。そうしなければ漁師さんとの距離が縮まらない。そのためには、睡眠時間を削ってやるしかありません。そして捕ったあとの流通もしっかり勉強して、それなりの値段で、消費者のニーズに応えられるようになりたい、いつかは川一本で生活できたらいいと考えています。いえ、川一本で生活する覚悟です。



富樫 これからの希望とか、こんなことをしていきたいということはあるですか。

平工 親は漁師ではないので、私は流域で出会った大人に育ててもらったと思っています。子供の頃から社会人になってからも、川で出会う大人たちが本当にかっこいいので、こういう大人になりたいなと思って育ってきました。でもいざ私が川で生きていきたいと言うと、「そんなことは止めておけ」「とろくさい」と言われるんです。私自身まだ3シーズン目で漁の技術は低いです。でもそれを見て、あいつは駄目だと罵ってばかりではなく、若い世代がどうやって育っていけばいいのかを組合組織としてそろそろ向き合うべきだと思うし、新たな時代の流れに沿った次世代の活動なども見守ってもらいたいとも思います。若い世代が育たなければ10年後、いや5年後、川で仕事がしたいという更にその次の世代が生まれないことは誰の眼から見ても明らかですし、10年後にそのような次の若い子たちを川で育てていくのは間違いなく僕らです。なおさら「いま」川漁の技術を高めておくことが大切だと自分に言い聞かせています。

大橋 あのねえ、こんだけの方が長良川を思って来てみえる。ぜひ頑張って答えを出してください。お願いします。

平工 この川で生計を立てられるよう頑張ります。



大橋兄弟と長良川の深い関わりは、「長良川漁師口伝」(大橋亮一・修/磯貝征司/人間社)に見事に描かれています。

平工さんの結の舟の活動は **facebook** でご覧ください。 <https://ja-jp.facebook.com/結の舟-yui-no-fune>

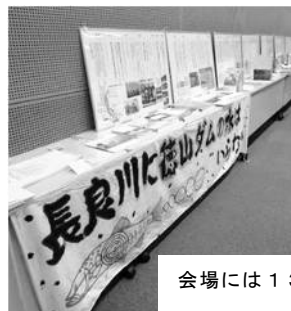
長良川のサツキマスや天然遡上アユが絶滅危惧になるのではないかと心配されていますが、そこで生計をたてる大橋兄弟のような漁師さんたちがいなくなることは、私たちにとっても大切な川と共に育まれてきたさまざまな文化を失うことになるのだと改めて感じました。平工さんの挑戦を応援していきたいです。(まとめ・文責 田中万寿)



Ken と Minoru の長良川ライブ



長良川と金華山をながめて昼食をとる参加者



会場には13mの長良川河口堰年表と貴重な資料・文献が多数展示されました。

球磨川 荒瀬ダムからの報告

つる祥子（自然観察指導員熊本県連絡会会長）



熊本県の球磨川（くまがわ）は、全長 116 キロメートル、長良川のおよそ 3 分の 2 の川です。その本流に最初に建設されたのが荒瀬ダム、次にその上流に瀬戸石ダム、市房ダムができて、下流には遥拝堰（ようはいぜき）や球磨川堰と、次から次にダムや堰が完成しました。ダムができたことによって放流事業が必要になり、球磨川漁協という内水面漁協ができ、今は球磨川堰に上がってくるアユを掬いあげてトラックに乗せて、流域の三十数カ所に放流させることでアユを守っています。

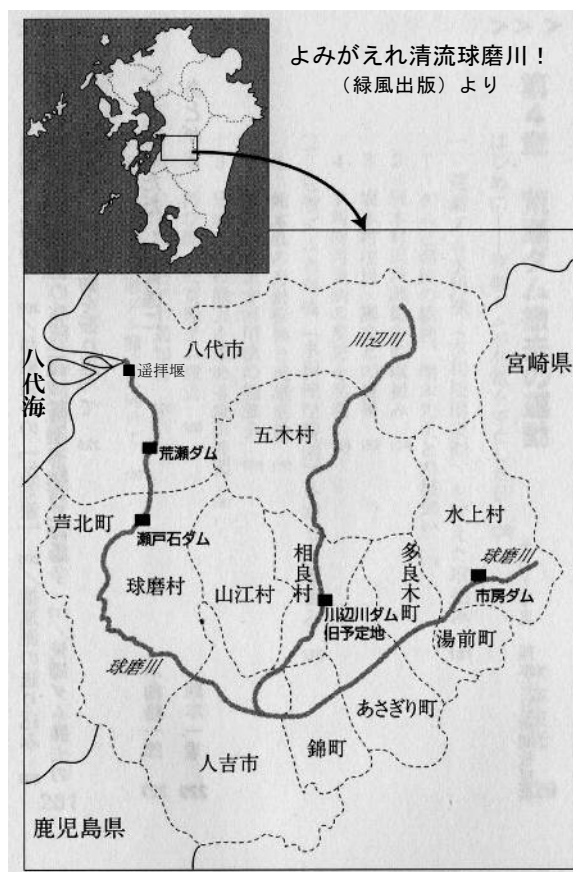
■ 球磨川の昔とダムが出来てから

ダムがなかった頃の球磨川は、流域に 2000 人くらいの専門漁師がいて、3月になるとスイカのおいしさがわかって、アユの遡上がわかったと言われていました。「棒で水面を叩くとアユがポコポコ泳いだ」「服を着たまま川に入ると、アユがポケットに入ってきた」「アユやウナギで川が真っ黒になった」など、今でも語り継がれています。生活も遊びも生業も球磨川と共にあって、球磨川をとったら流域には何も残らないくらい恩恵を受けていました。河口の八代漁協は、冬は海苔つみ作業、夏はエビ漁で、1ヶ月漁をすると家が建った、舟が買えたという話をいっぱい聞きました。

ダムが出来てから、最初に被害が出たのが浅草海苔です。海苔にセメントかすがついてとれなくなり、ダムが出来上がったころには海苔漁師は三分の一くらいに減り、800人位いたのが今は2軒のみ。次は、ダムが振動する時に建物が揺れ、建具が音をたて瓦が落ちるといった振動被害でした。そして、アオコが発生し夏になったら近寄れないくらい臭くなりました。さらに本来だったら干潟までいく土砂がダム湖にためられ、大水でゲートが開けられると一気に土砂が流れ、下流で洪水被害が起きました。

昔は大事なものは2階において、大水は出ても被害は受けない暮らしをしていました。ダムができた後は、ダムが一気に放流するので、2階まで水が一気に来ました。昔は大水が来たら各家庭に大網があって、アユを掬いに行くのを楽しみにしていました。アユもいっぱい来る、砂もいっぱい持ってきてくれるというので、恵はあっても被害が何も出ないというのが昔の大水でした。

球磨川は現在、どこで調査しても17、8種から20種くらいの魚種しかいません。昔は60種位いました。減ったのは、まず移動性のヨシノボリやカニ、あとは汽水性の魚。昔は人吉市近くまでボラや



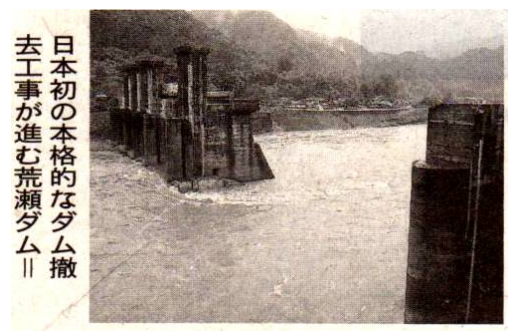
スズキがいっぱい上っていましたが、そういった魚が本当にいなくなりました。

海の方では、赤潮が対岸の天草まで続きました。アサリは、ダムができて15年くらいまでは、一人で1日1トン捕れていたのが平成10年くらいには1日200キロに減りました。それからばたっと捕れなくなって、平成24年に少し復活して1日60キロ、そして今、減っているという状況です。車エビの漁獲量も、放流事業をしていますが減って行って捕れなくなってしまいました。「自分たちが一番の絶滅危惧種たい」というくらい漁師達もどんどん減っています。

■ 球磨川、不知火海を守りたいダム反対運動

川辺川ダムがきっかけで、1993年頃からいろいろな運動が始まりましたが、何より世論を高めたのは住民討論集会です。住民の方から治水代替案を出したら、その当時の潮谷知事が「代替案があるなら国交省とどちらが正しいか議論せよ」ということで始まり、2年にわたり9回行なわれました。最初は相良村6千人のうち3千人くらい集まり、資料作りなど本当に大変でした。同時に荒瀬ダムも具体化していきました。この中で国交省の資料がどんどん開示されるようになり、ダムの問題点が明らかになって、世論もどんどん高まっていきました。川辺川、荒瀬ダムの運動は、市民の運動と漁民の運動、農民の運動の3つに大きく分けられます。市民の運動では、集会や要望書を出したり住民投票をしたり代替案を作ったりしました。二千人いた漁民は、補償金の争いや委任状取りで二千四百人くらいに膨れ上がり、市民も一緒になって対応しました。裁判も、七百人分くらいの意見書を書きました。農民も二千人が裁判をしました。この間にダム反対の世論が80%くらいに高まっていき、選挙という結果になって現れました。ダムができる相良村や一番の水害常襲地の人吉市、下流の八代市でダム反対派の首長が誕生したのです。荒瀬という名前のつく団体を作って撤去運動を始めたのは2002年で、その年の12月には、潮谷知事が撤去を決定しました。荒瀬ダムの問題は川辺川の運動の中でずっと取り上げてきて、7年後からの撤去を楽しみにしていましたが、2008年に代わった蒲島知事が突然、撤去を凍結しました。再撤去が決まるまでの2年間の運動は、我慢してきた50年より辛かったと地元の人も言うくらいです。

川辺の運動は、人吉市から始まって、八代市、熊本市でいろいろな団体ができていきました。漁業者、水害体験者、農業者、内水面漁協、それを支えている弁護士や水源連、自然保護協会と多くの研究者を巻き込んで運動が面的に広がりを見せていきました。私が関わってきたクマタカやアユ、水質、堆積物、干潟の調査は、住民との集会の時に大きな役割を果たしました。この成果があって、2009年、蒲島知事が川辺川ダム反対を表明しました。そして2010年1月29日に再び荒瀬ダム撤去が決定しました。何より喜んだのは、50年前、60年前の球磨川に戻りたいということで頑張ってきた70、80代の人たちです。2012年9月1日から本格的なダムの撤去が始まりました。



2015年7月6日 朝日新聞より

■ 荒瀬ダム撤去

ゲートが開けられて、水位が下がって、ダム湖があったところは蛇行する流れが現れ、瀬の淵も戻ってきました。河口の干潟では、足が入ると抜けられない状態が、歩きやすくなり多くの人々がアナジャコ捕

りをするようになりました。藻場も徐々に回復してきて、いろんな魚が休みに来るようになっていきます。砂が増えて藻場が増えると、急にウナギや車エビやマテ貝が捕れた、アオノリが3メートル以上も伸びるようになったなど、海が一番早く回復しました。

支流もダムがないので回復が早く、ヘドロだらけの所も小砂利が増えて、1～2年できれいに回復しアユもいっぱい来るようになりましたが、本流にはなかなか戻ってきませんでした。アユは産卵のため瀬戸石ダムまで下ってきますが、秋は閉まっているので下れません。下流の荒瀬ダム撤去で、産卵場や漁場が増えても、下ってくる親アユがいないことには増えません。増えるのは台風で瀬戸石ダムのゲートが開く時です。またここで生まれたアユは、下流に遙拝堰があるので海まで下れません。荒瀬ダムの効果はアユなど移動性の魚に関しては手放して喜べないのです。瀬戸石ダムがある限り、アユも上ってこないし、水質の改善にも限度があります。ダムは堆積物を貯め込んでいるので水害もなくならないし、夏になればアオコが発生します。ちょっとしたゲート全開では、せっかく回復したところを泥が覆ってしまいます。調査した結果、わずか河口から8キロのところにある遙拝堰の下まで親アユが辿りついて、そこで生まれたアユだけが海に下っているという状況です。球磨川流域は森林がとても荒れていて、放置林やシカの食害がひどく、川の水質を悪化させています。荒瀬ダムだけを撤去しても、荒瀬ダムから瀬戸石ダムまで50年間貯めてきた土砂が少しずつ下に供給されるようになったただけの話です。

■ 私たちの願い

今、瀬戸石ダムも冬季2ヶ月間開けていますが、開けると2週間もたらずに川底が見えるくらいきれいになります。瀬戸石ダムのゲート全開が私たちの願いです。今では事業者が情報開示をしてくれています。隠すものがないからです。事業者との間に垣根がないことが、住民が望む公共事業だと実感しています。荒瀬ダム撤去は注目を浴びて国内や海外から大勢の人たちが来ていますが、観光に生かそうという行政ではないのがとても残念です。荒瀬ダムの撤去が球磨川再生のきっかけになればと思っています。

私の願いは、ぜひ長良川に続いて欲しいということです。荒瀬ダム撤去を特別な例として終わらせようとしています。きっかけにはなっていますが、今の河川行政の在り方を変えるには長良川を開けるのが一番です。これは瀬戸石と荒瀬と遙拝堰のゲートを一度に開けたような効果だと思います。川辺川が全国的な問題になったように、全国規模のレベルにしてつなげ、広げていって欲しいと思います。私の願いは、樹林の再生と二つめの荒瀬ダムゲート全開のような現場が出て来てほしいということです。

つるさんは、まとめとして「長良川に続いてほしい」という願いを語られた。日本の川の良き象徴であった長良川が、河口堰があることで死んでいく川としてこのまま負の象徴となり続けるのか、河口堰が開放され撤去されることで復活の象徴となるのか。荒瀬ダム撤去と球磨川復活の様子を聞き、あらためて復活の象徴としての長良川と、本流に1つもダムが無く世界の川の象徴となった長良川を見たい思いが強くなった。 (まとめ 掘 敏弘)



霞ヶ浦からの報告

浜田篤信（元茨城県内水面水産試験場長）



はじめに皆さんにお礼を申し上げたい。一つは、那珂川のアユ裁判の判決前に水戸地裁に出した署名を長良川のみなさんからたくさん送っていただいたことです。二つ目は、那珂川にも河口堰計画がありましたが実現せず上流にダムが一つもできていないのは長良川河口堰反対運動があったからです。三つ目に霞ヶ浦逆水門完全操作から40年目の節目の今年、長良川河口堰閉鎖20年目のこの集会に呼んでくださったことです。今後も開門実現に向け、一緒にやれたらと思っています。

私は霞ヶ浦の漁協の組合員ですが那珂川の漁協組合員ではありません。なぜ、この那珂川の導水路反対運動に参加しているかと言いますと、導水路を造ると霞ヶ浦の水門は永久に開かないからです。導水路を造らせないで、霞ヶ浦の水門を開け、霞ヶ浦の環境を回復したいのです。簡単なことではありませんが、なんとしても実現したいと考えています。

■霞ヶ浦水資源開発とは

汽水湖霞ヶ浦の水ガメ化により農業、工業、飲料水を開発する総額1兆1407億円の巨大大事業。導水路事業もその一つです。

利根川に河口堰を、霞ヶ浦の下流、常陸利根川と利根川の合流点に常陸川水門（逆水門）を造り、1975年に操作が開始されました。逆水門の閉鎖は霞ヶ浦の環境や生物多様性に大きな影響を与えてきましたが、開発事業の影響評価は実施されていません。漁民による抗議や、市民から逆水門開放や柔軟運用による環境改善の提案が幾度となく行われてきましたが実現には至っていません。



■霞ヶ浦導水反対運動

霞ヶ浦導水路は霞ヶ浦と那珂川、利根川を地下水路で結び、水を融通するもので、那珂川から最大毎秒15トン取水、逆に霞ヶ浦から那珂川に11トン送水する計画です。霞ヶ浦などの浄化、新規都市用水の開発などを目的とし、1976年に計画着工、1981年に建設着工しました。

2000年には市民団体が住民訴訟も行いましたが敗訴。その後国が漁協の同意を得ることなく那珂川取水口の建設を強行したことに対し、2009年に茨城・栃木両県の那珂川水系全ての8漁協が結束して、子孫に川を残すんだという思いで立ち上り、工事差止め訴訟（アユ裁判）を起しました。この裁判に対して、全国の研究者が「霞ヶ浦導水路事業那珂川漁業・生態系影響評価委員会」を組織し調査研究で法廷闘争を支援、また全国の約100人の弁護士からなる弁護団が結成されました。

私はこの裁判を支える「霞ヶ浦導水路事業を考える県民会議」の共同代表をしており、県への中止要望、監査請求、住民訴訟を起し、敗訴した後も霞ヶ浦浄化代替案を提案するなど国、県へ働きかけを続けています。茨城県には、市町村や商工会、労働組合などの連合組織からなる「茨城共同運動」があり、毎年7月に県と諸問題を議論したり、要望を出したりしています。行政と対話の窓口があることは大切だと思っています。きょうここへ来て驚いたことは、ここでは岐阜大学の先生がたくさん関わっておられるということです。このことは全国的にみてもそう多くないと思います。茨城にも筑波大学などがありますが現役の先生の支援は得られていません。



常陸川水門

■那珂川導水路裁判で問われたこと

裁判では公益性、漁業権侵害、生物多様性損傷を争点にしてきました。公益性について言えば、水質浄化では、湖水のCODを8mg/lから7.2mg/lにわずか0.8mg削減するというもの。これでは良くなった

か分からない程のもので、会計検査院から「効果がないから止めた方がいい」という勧告を受けたほどです。新規都市用水開発については、もう水は余りに余っているのが実情ですが、国はその水を危機管理用水や環境用水に使うと言っています。

漁業権侵害では、導水路を造ることで取水によるアユ仔魚の吸い込み影響、流量減少によりヤマトシジミが激減する恐れ、環境悪化や工事による漁獲減が争点になりました。アユについては多い年では年間1400トンの漁獲があり、全国一。シジミについては河口堰がないおかげで専業漁師が300人程で漁獲は全国3位か4位。しかし2000年に2000トンあったシジミが2011年の地震で河口が20cm下がって半減。導水による河川流量の低下、河川工事の掘削の影響でさらに半減するのではないかと危惧されています。

3番目の生物多様性損傷については、異なる水系の水の互換は生物多様性条約や生物多様性基本法に抵触するが、国は生物多様性条約は国際的なとりきめで国内法では取り締まれないという回答でした。当時はそれですんだかもしれませんが、今ではそんなことは言えないはずです。(7月28日の水戸地裁判決は原告敗訴。高裁へ控訴しました。)

■ 3・11からの教訓

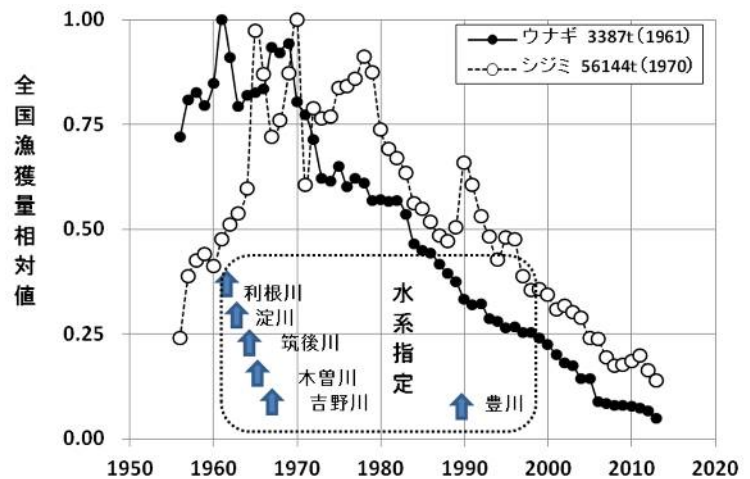
2011年3月11日の東日本大震災で堤防の陥没が150~160ヶ所発生。また鹿島灘から北浦にかけて4mの津波が侵入し、一部の地域では浄水機能が麻痺。農業用水の送水システムが破損し一部の地域では半年間使用不能になりました。利根川河口を遡上した津波は逆水門の天場まで迫ったが、かろうじて越波を免れました。霞ヶ浦は上水の水源になっている汽水湖です。汽水湖や河口堰による水源化はやってはいけないというのが今回の教訓です。多目的ダム、巨大システム一局集中は危ない。地域に見合った規模にすることが大切です。

■ ニホンウナギ絶滅危惧種指定と霞ヶ浦開発見直し

ニホンウナギが一昨年環境省によって、昨年国際自然保護連盟によって絶滅危惧種1B類に指定されました。利根川水系のシラスウナギの漁獲量は1970年以前は全国の80%でした。親ウナギがマリアナ海域まで行って産卵して帰ってくるシラスウナギの減少は逆水門・利根河口堰と関係しているのではないかと考えています。

全国の水資源開発法による水系指定の時期と全国のシジミとウナギの減少が関係していることがグラフからも分ります。

日本の沿岸漁業、内水面漁業の漁獲高減少の最大の原因は公共事業だったのではないのでしょうか。戦後70年続いた多目的ダムを中心とした水行政を、今こそ生物多様性を確保できる水政策に見直す時期にきていると考えています。



■ 地域を越えて連帯を

生物多様性と水資源開発管理が両立する新しい水行政に変えていくにはどうすればいいか？ 単独ではなかなか難しいですが、まず、それぞれの地域で漁業者、市民、研究者、行政を組織化した運動をきちんとしていくこと、そして、全国各地の運動が連携して国の制度を変えていきたいと思っています。

(まとめ：田中万寿)

『ばばちい川になってしまった』『長良川を助けてやってください』長良川漁師の大橋さんの言葉が心に響きました。7月5日(日)のトーク&シンポジウム「よみがえれ長良川」でのことです。

その前日、長良川自然観察会に参加していました。汽水域の消滅した河口堰下流側は、シジミはもちろん、海の生物も棲めないヘドロの沈殿した水域であること、河口堰上流側は水位が上がったため広く見られたヨシ原がほとんど消えただけでなく、堤防を隔てた揖斐川の河川敷に広がるヨシ原には笑えるほど沢山いたカニ一数だけではなく、大きいことから小指の爪ほどの小さなものまで様々も他の生物もいる気配がなく、動かない水面の広がるまさに「死んだ川」だということを観察し、実感してきたところでした。

祖父母の住む岐阜市を流れる長良川は、私には子供の頃から最も親しみのある川です。夏に祖父はビニール風呂敷に包んだトロ箱にいっぱいのかきを持って名古屋まで来てくれました。冬になると「いかだばえ」です。毎年の花火大会、金華山と長良川の景観など、たくさんある長良川にまつわる思い出の中でも川で泳いだ時のことはいつ思い出してもその感覚までよみがえってきます。

かつて、丸く扁平で大きな石がたくさんゴロゴロしていた河原は、ゴム草履(と言うと世代がわかりませんが…)では歩きづらく、でも裸足では熱くて歩けない。泳いでいると時々とても冷たい流れに出会い、寒くなってしまう。そんな時は熱い石の上に寝転ぶと温かく、気持ちよかった。

しかし、いつの間にか河原の景色は変わりました。あの大きな石はどこに行ってしまったんだろう? 景色だけでなく長良川の環境が大きく変わり、魚や生物が減り、川漁師も減っています。長良川の流域の生態系の一部や長年続いてきた様々な文化や技術が失われようとしているということです。「清流長良川のかき」は世界農業遺産を目指そうとしているけれど、長良川の下流は置いてきぼりで、天然遡上かきは準絶滅危惧種となりました。何かちぐはぐでおかしいです。大日岳をはじめとする山々と伊勢湾を結ぶ長良川が上流から下流まで本当の意味で「清流」と呼ばれる姿をとりもどしてほしい、そのための一つとして河口堰の開門調査も必要だとの思いを強くしました。

「よみがえれ長良川」の今後の予定

●ステッカーキャンペーン

開門調査実現の世論を広げるために実行委員会は9月、「よみがえれ長良川」ステッカーを作成し広げるキャンペーンを開始しました。長良川中流の関市で30年間毎日観察し描かれた後藤宮子さんの回遊魚の絵を使ったステッカーです。2種類1組を美しいリーフで挟み200円で販売しています。注文は「よみがえれ長良川」のホームページ<http://nagaragawa.jimdo.com/>からできます。魚・川を愛する人へのプレゼントに最適です。開門調査を実現するためにぜひ普及してください。



●2016/1/31 伊勢湾流域圏の再生シンポジウム

「よみがえれ長良川」実行委員会は、愛知・岐阜・三重各県で「開門議論」が起こるよう協議を進めています。とりわけ河口堰問題の議論が顕在化していない三重県での取り組みを模索しています。当面、まずは海の視野から流域を考える「伊勢湾流域圏シンポジウム」を伊勢三河湾流域ネットワーク、中部の環境を考える会、四日市ウミガメ保存会、国連生物多様性の10年市民ネットワークと共催で来年1月31日(日)四日市市の「じばさん三重」ホールにて開催します。海の博物館館長の石原義剛さんなど登壇者も多彩です。ご期待ください。

「導水路」事業の中止求めて今後とも粘り強く活動を！

導水路はいらない！愛知の会・共同代表 加藤 伸久

◇ 高裁は地裁「不当判決」を踏襲して控訴を棄却

名古屋高裁は9月17日、導水路中止裁判「控訴審」について住民請求を退ける判決を言渡しました。判決は、原告住民が明らかにした事実から目を背けて、真実を無視し続ける愛知県等の行政や地方裁判所を庇い、高等裁判所の責務を放棄するもので、文字通りの「不当判決」です。

名古屋高裁の判断は、被告・愛知県知事らにとって「不都合な真実」＜愛知用水地域の水需要は目標年の2015年になっても基準年の2000年を下回っており、「徳山ダム供給水は不要」＞を無視し、＜「木曾川水系は全国的に見ても渇水の頻度が高く、流域の給水人口は増加傾向」「長期的に安定した給水の必要性から、安全性を考慮して余裕を持った想定需要を設けることは許容される」＞とし、原告が求める公金支出差止を認めませんでした。

◇ これ以上の税金投入は犯罪的行為！最高裁へ上告

木曾川水系（揖斐、長良、木曾の三川）の水源開発問題は、流域住民および全国的な世論の反対の声を押し切って相次いで強行建設された、長良川河口堰や徳山ダムなどで確保された水源が未利用のまま長年放置され、税金が垂れ流しとなっていることです。完全な水余り状態のなか、890億円もの公金を投入する導水路事業はムダどころか、ムダを超えた犯罪的行為です。

「不当判決」言渡し後の集会では、在間弁護団長が「需要の減少を前提とすべきなのに、不都合な事実を横に置いた」と痛烈に批判し、小林共同代表は「ムダな導水路事業にお墨付きを与えるような司法判断で残念、最高裁で勝利するべく今後とも粘り強く活動を」と訴え、会場の参加者一同が総意で上告を確認。9月30日、75人が上告人となって最高裁へ手続きを取りました。



12月5日最高裁「上告」決起集会で決意表明する原告の宮崎武雄さん

◇ アベ暴走政権の下、「導水路」検討の場が動き出した

民主党「コンクリートから人へ」政権の公共事業見直しを受け、凍結・検討扱いの導水路事業について、4年ぶりとなる11月11日（水）、第3回「検討の場」（幹事会）が開催されました。高裁不当判決を見届けた大村知事のコメント「極めて妥当。国が事業の検証を進めており、愛知県も取り組んでいく」（翌9/18の新聞報道参照）どおりの展開となっています。

これに対し、11/17（火）、長良川市民学習会と「合同対策会議」を開き、関係自治体が事業撤退に向けた行動を促すよう、火急に「働きかける」ことを確認しました。特に参画継続を検討しているという名古屋市には、市議会の全政党へ「要らない事業にお金を注ぐべきでない」「今のうち（本体工事にかかる前）なら、撤退負担金ゼロ円で撤退できる」ことを強く要請します。

◇ 「撤退＝事業中止」めざし闘いの輪をより大きく

2010年2月の県知事選・市長選に際して、大村・河村両氏の共同公約に「導水路事業は見直す」と文言が入ったのは、住民訴訟を含む運動の成果です。ところが、昨年2月の県知事選にオール与党体制で出馬の政治家・大村氏は「導水路」問題に沈黙……。

アベノミクス不況で多くの県民が苦しむ時代、「財政が苦しい」を枕ことばに福祉・医療・教育の施策に大ナタを振るう一方で、ムダな「導水路」事業に愛知県が318億円、名古屋市が216億円もの公金を投入することは断じて許せないことです。私たちは微力だが無力ではありません。戦争法や秘密法、原発など、安倍政権の暴走政治に反撃する仲間たちとともに、愛知県と名古屋市の事業からの撤退による「導水路」事業の中止をめざし、粘り強く活動を進めて行きます。



校歌に歌われた長良川 ②1

岐阜県立 長良高等学校校歌

作詞／土岐善麿
作曲／信時 潔

一
仰げば金華山みどりかがやき
たどれば長良川みなもと遠し
ああ真理の嶺高くきびしく
時代の流れ浪もゆたけし
われらは知れり常に学べり
世界の道の新たななるを

二
歴史の開けゆく濃尾平野よ
希望はあふれたり郷土の上
ああ文化の花清く薫りて
自由の風に浮かぶ雲なし
われらは立てり更に進まん
友情深し長良高校

長良川を締め切った旧古川跡地に戦後、岐阜市が住宅地を作りその家から長良中学と長良高校に通いました。長良高校は昭和二四年の学区制実施によりそれまでの岐阜市立商業高等学校に普通科が設置され、県に移管されて現在の県立長良高等学校となり、商業科は県岐商になりました。この校歌は昭和二八年に新しく作られました。「ニュースNo.17」で紹介された県岐商の校歌は甲子園でもおなじみですが、歌詞の・・・城北の地に聳え立つ・・・は口こそ出しませんが県岐商ではなく長良高校です。長良高校は贅沢にも校歌を二つ持っていると思っっています。それはともかく岐阜の子はみんな金華山と長良川に育てられます。
(粕谷豊樹)

事務局から一言

● 長らく離れていた故郷の川について何も知らなかったことに気づかされた年でした。必要のない河口堰、ダム、導水路。前時代的ともいえる愚かな計画（環境破壊）に開いた口がふさがりません。今になって長良川の素晴らしさを実感、長良川は岐阜の宝です。

Free the NAGARA RIVER! (高橋由実)

● 1100兆 西平濁り 静まりて冬
(導水路取水口計画地にて)
あゆの仔が 自分で下れん 秋おわり
この星よ たわわひずみて 暮れゆかん
もうひとつおまけ

iS 習近平 晋三 みんな勝手に年の暮れ
(粕谷豊樹)

● 今年7月、長良川市民学習会にカンパをお寄せいただいた方がなんと1000名になりました。私はカンパをいただいた方にお礼のハガキを送る係ですが、県内はもとより遠い地から届くことも随分あります。長良川は本当に全国から愛され注目されているんだなあと感じます。ありがとうございます。新しい年も皆さまのご支援に応え頑張りたいです。(岡久米子)

● 大義がない、道理がない、情もない。あるのは居丈高な強権だけ。

辺野古新基地建設を、沖縄の人たちは“身体を張って”止めてきた。沖縄県の「国」に対する法廷での一連の闘い。12月2日に初めての口頭弁論。

長崎県石木ダム建設を、川原(こうばる)の人たちは“身体を張って”止めてきた。11月30日、石木ダム事業認定取り消し訴訟提訴。法廷での闘いも始まった。石木ダムを造らせてはならない。(近藤ゆり子)

● 気が付けばもう年の瀬。年々時間の経過が早く感じられます。私も前厄となりました。

今年は河口堰が運用されて20年。生物多様性COP10から5年です。市民学習会に入って活動してきましたが仕事の都合などでスケジュールが合わず出席できない行事が多くありました。

そんな中、「よみがえれ長良川」のステッカーはとても良いデザインで手帳に貼り時々眺めています。

原作者の後藤宮子さんの講座を小学生の時受講したことを思い出しました。よみがえった長良川の姿をイメージして活動していこうと思います。

みなさま良いお年をお迎えください。(中川篤)

発行：長良川市民学習会

<http://dousui.org/>

代表：粕谷志郎

連絡先：武藤 仁／090-1284-1298

〒500-8211 岐阜市日野東 7-11-1

● 私たちの活動は皆様のカンパで成り立っています。賛同してくださる方は、ぜひカンパをお願いします。

ゆうちょ銀行口座：00840-3-158403

口座名称：長良川市民学習会